

学者。偶然のきっかけからブータン国立図書館の建設にかかわり、10年を彼の地で過ごした。館長の高僧ロポン・ペマラと、第四代国王ジグメ・センゲ・ワンチュックとの交流を軸にして、独自の近代化を進めるブータンの内情を語っている。専制君主である国王が、「国民総幸福」というモットーに基づいて、自らの意思で議会制民主主義を進め、しかも王の定年制や弾劾制までを制度化したことは、世界的に有名でありかつ畏敬されている。王や高官としょっちゅう話ができる小さな政府の中で得られた、仏教を土台とするブータン人のものの考え方は、われわれ競争社会の常識が決して最善のものではないことを反省させる。国立図書館でありながら年に一冊も本を購入していないという奇妙な事実も、本・文献・経典などについての考え方の根本的な違いについて、あらためて考えさせる。

面白かったのは、登山禁止条例に至る経緯である。1980年に登山を解禁した結果登山隊が殺到し、外貨獲得の大資源になると期待された。ところがブータンにはポーターという職業がないため、政府は地元民を徴発してこれに当てた。これは人頭税に相当する合法的な徴用の一種であったが、この結果農牧民である彼らは家業を奪われる結果となり、王に直訴した。ブータン国民は王に直訴する権利がある。その趣旨は「仕事のない人たちの仕事のために、自分達の仕事ができない」というもので、王はこれを認めて登山は永久禁止となった。われわれの海外調査でも、「人夫を雇う」ということに何の抵抗感もないが、それが「仕事のない人たちの仕事のために」、彼らの仕事を奪うと思われる社会もあるということ、頭にとめておく必要があるだろう。日本だって、少し前までは「草なんか取って何になる」と、ちょっと違う分野の人にさえ言われたではないか。一方、ネパールでは、公務の旅行ですらポーターを雇うのに連日四苦八苦している現実、あらためてポーターという職業がある社会だということ認識させる。

もう一つの驚きは、著者がブータン入国許可を得るために、大学の夏休みの三カ月をデリーで待機するというのを5年間も続けたことである。日本の研究室で、こんなことが

許されるところがあるだろうか。

(金井弘夫)

□東京地図研究社：地べたで再発見「東京」の凸凹地図。B5。128 pp。2007。¥1,764 (税込)。技術評論社。ISBN: 4-7741-2605-5。

地図は地形を読んでコースを案じたり、植生を想定したりと、誰でも使っている。しかし都会地では地表の構造物が多くて、等高線をたどることはむづかしい。本書の21-76頁では、二枚の空中写真を重ねて一枚に合成した写真(アナグリフ)を、付属の赤・青フィルタを通して見ることにより、立体視できるようにしてある。都心部、多摩ニュータウン、石神井川、青梅インターなど、25枚のアナグリフが、それに対応する略地図を伴って地形学的な解説がつけられている。これはときどき類書でもお目にかかるものである。

77-127頁には、地表の余計な物を取り払って高度だけで描いた陰影図(陰影段彩図)を用いて、22地域(2-15 km 四方ほどの範囲)の地形の詳細を解説していて、たいへんおもしろい。たとえば渋谷は地形探索に絶好の場所で、西武百貨店の並立する二つのビル間に地下連絡通路がない理由だとか、横浜が港湾として優れているのは後背地が狭いため、ランドマークタワーのような高層ビルが、埋め立て地に杭も打たずに建てられているわけ。府中の浅間山が、多摩川でなく相模川の河岸段丘の名残りだとか、不忍池に流れ込んでいた石神井川が、飛鳥山で隅田川へと流路を変えた原因が不明だとか、言われてはじめて「そうか」と知るトピックが並んでいる。地形と関連ある地名も、ところどころ解説されている。

118-127頁では、中央線(東京-新宿)と小田急線(新宿-喜多見)の車窓風景が、地形と関連づけながら解説されている。また8-13頁は「山の手台地縦断ウォーク」と題して、同じ趣向で国会議事堂前の日本水準原点から多摩川二子橋までの解説がある。なにも知らなければ、ビルの谷間の坂を上がったり下がったりする退屈なコースだろうが、地形学的に見る目があれば、違った自然観察ができるものなのだということがよくわかる。ふつうの地図で見かける段彩図は、等高線間を

色分けしたものだが、陰影段彩図は等高線を使わず、高度別の色ドットに、斜光線の方向に応じた明暗付けをしたもので、傾斜がゆるくて等高線が間遠になる平野部の起伏の表現に適している。これによって地面の微妙な凸凹が、意外なほどはつきり感じとれる。数値地図の整備と処理ソフトの発達のおかげである。こういう地形は最終間氷期の堆積物が最終氷期に陸化して浸食され、後氷期の現在までの間に形作られたもので、人類を含めた生物の生活や分布に大きな影響を与えているはずなので、調査や研究のヒントを与えられるだろう。他の地域についてもほしい読み物である。(金井弘夫)

□青柳武彦：個人情報「過」保護が日本を破壊する。新書版。245 pp. 2006. ¥700. ソフトバンククリエイティブ(株)。ISBN: 4-7973-3691-9.

本誌83巻6号(2008)で、同じ著者の「情報化時代とプライバシーの研究」を紹介し、コピーを送ったところ、本書をいただいた。前書は論文調でむつかしかったが、本書は一般向けで読みやすい。個人情報保護法の問題点、とくに「個人識別情報」(この単語はここではまだ使われていない)と「プライバシー権」の認識不足が、社会活動に萎縮と混乱をもたらしていることが、名簿類の発行中止などを例として論じられている。これを読んで、かつて日本植物分類学会名簿を作ったときのことを思い出し、古い名簿をめくってみた。当時はまだ「個人情報」という単語が普及する前で、「プライバシー」という単語がなんとなく流用される程度の時代だった。私は、名簿は会員のコミュニケーションのために作るものだと思う。たとえば手紙や電話で話をするのに、相手の氏名の読み方がわからないと困る。性別や生年月日によって通信のときのこちらの言葉遣いの選択と共に、相手の時代背景の推測に役立つうえ、論文で言及するときにはHeにするのかSheにするのかが判断できる。とくに外国人には、氏名綴りのどこが姓なのか、敬称としてMr., Miss, Mrs., Dr.のどれを使ったらよいかなどの判断材料になればよいと思い、名簿用紙にはそれらの記入欄を設けた。しかしそういう意図は理解

してもらえず、「女性の生年月日など尋ねるものではない」「Mrs.とMissを区別させるのは失礼だ」「Dr.の有無をわざわざ書かせるのはいや味だ」等、いろいろ文句があって、空欄が多かった。今見ている1975年の名簿は、私の作品としてはたぶん二回目あたりのものだが、敬称は削って性別だけ示してある。こんなことは日本人には無用だが、外国人には氏名から性別を推定することはできないので、役に立つはずだ。姓のローマ字は大文字とし、かつその順序に配列してあるので、外国の人が「どれが姓か」と迷わないで済むだろう。連絡先の英字も用意はしたが、頁をとりすぎるので割愛した。国際植物学会東京大会のとき、この英字部分のみを抽出してTaxon購読者名簿を作り、free pamphletの棚に置いたら結構需要があり、二度作り足した記憶がある。

一番気になった生年月日だが、1975年の分類学会名簿では86.3%の人が表示している。上記の方針は次第に忘れられたようで、その上「個人情報」問題がふくらんで、名簿の表示項目の一つ一つに当人の了解をとるようなご時世になったから1998年の植物分類学関係関連学会合同名簿を見ると、性別項目はなく生年月日の表示率はわずか36.5%である。これは方針が異なる学会の名簿を合体させたものだからやむを得ないが、その中から植物分類学会の分だけを抽出すると83.6%に表示があり、昔と大して違いがない。分類学会以外では、そんな配慮をした会はなさそうだ。ところが2005年の合同名簿では表示項目が見直されたく、生年月日も性別もなく、50音配列となった。本の紹介から脱線したが、こらで「プライバシー権」というものを認識し直して、名簿の役割を復活させるきっかけにできないものだろうか。そういうことを考えるのに役立つ本である。

なお、青柳氏のアドバイスによると、個人情報に関する各種の相談・紹介は内閣官房の所管であり、連絡先は次の通りである。

内閣官房内閣総務官室個人情報保護窓口  
100-8969 東京都千代田区永田町1-6-1  
Tel 03-5232-2111 内線82891 Fax 03-5510-0659  
(金井弘夫)